「ここが神様の家」

エフェソの信徒への手紙　２：１１-２２
マタイによる福音書　　１２：４９－５０
マタイによる福音書　　１８：２０

２０２３年8月１３日
野村　友美 師

＜家と家族＞

今週はいわゆるお盆の時期ですね。
普段は離れた場所で暮らしているご家族も、この時期には帰省して来られて、久しぶりの実家を味わっておられるかと思います。
さて、皆さんにとって「家」とは、どんな場所でしょうか？落ち着けたり、落ち着かなかったり、安心できたり、そうでもなかったり、家に何を感じるかはそれぞれだと思います。
なんにしても「家」はまず、生活の場所だと言えるでしょう。そこから出かけて行って、またそこに帰って来るための場所。食事をしたり、眠って体を休めたり、お風呂に入ったり、着るものを選んだりして、自分を整える場所。
自分の持ち物をそこに置いておいて、必要な時に取り出して使うことができる場所。
そんな風に、家は私たちの生活の拠点、つまり毎日生きて行くためのベースになる場所だと言っていいでしょう。
また「家」は、私たちにとって一番身近な人たち、家族と一緒に生活する場所でもあります。
私も今は一人暮らしですが、生まれてから
けっこういい大人になるまでは、家族と一緒に暮らしていました。

　もちろん「家族」というものは、血のつながりや戸籍のつながりだけで作られるものとは限りません。家族のかたちは様々です。
年齢や性別、性格や好みや価値観、いろんな違いの壁はあるけどそれでも生活のベースを同じ場所に置いて、日々を一緒に生きて行く。
そんな積み重ねが、お互いを「家族」と呼べるものに作り上げていくのだと思います。
それでも、というか、だからこそ、家族との関係は私たちにとって、時々とても難しく感じられるのではないでしょうか。
生活の距離が、そして心の距離が近づけば近づくほど、人はお互いの違いに敏感に反応します。
他人だったら気にならないことが、家族だと気になってたまらない。
他の人たちはともかく、家族にはなるべく自分と同じ価値観や考え方でいてほしい。
近しい相手だからこそ、そう思うのは、誰にとっても本当に自然なことでしょう。
それでも、やっぱりそれぞれに違う人間同士ですから、その違いを乗り越えるのは、なかなか簡単なことじゃありません。できれば相手の方から、違いの壁を乗り越えて自分に近寄ってきてほしい。そう願って葛藤しながら、何とか一緒にいて、でも時にはどうしても一緒にいられなくなったりもするものです。

＜隔てを取り除くキリスト＞

　今日の聖書の箇所で、使徒パウロはこの手紙を読むエフェソの教会の人たちに、こんな言葉を

送っています。

「しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。実に、キリストはわたしたちの平和であります。」

エフェソは小アジアと呼ばれる地域にあって、ギリシャ神話の女神アルテミスをまつる大きな神殿があったことで有名な都市でした。
あなたがたは、とパウロが呼びかけているエフェソの人たちは、ユダヤ人のパウロから見れば異邦人、つまり違う土地で、違う宗教や文化をベースに生きてきた、違う民族の人たちです。
そもそも当時のユダヤ人たちにとっての異邦人は、できるだけ関わらないように、と律法で決められていた相手でもありました。
もともとは、ご利益を求めて自分たちが作り出した神々を祭る異邦人たちのやり方に、イスラエルの人たちが引きずられて神様から離れてしまわないように、というのがこの律法の目的でした。
ですが長い年月の間に、「イスラエルの神様を信じない異邦人は汚れている、清い神様の民が関わっちゃいけない」と異邦人を見下して、差別するようになってしまっていました。
異邦人たちの側からしても、「それぞれいろんなご利益をくれる神々を祭って何が悪いんだ、ユダヤ人しか祝福しないイスラエルの神様なんて
別に自分たちには関係ない」という気持ちだったでしょう。決定的に隔たっていたユダヤ人と異邦人が、イエス・キリストの血によって近い者になった、とパウロはここで宣言しています。
自分たちとは違う、関係ない、関わりたくない、とお互いを区切って隔てていた壁は、もうイエス・キリストというお方が取り壊した。
ユダヤ人だろうが異邦人だろうが、すべての人が抱え込んで縛られている罪を、イエス様が身代わりに背負って十字架の上で血を流してくださった。だから、イエス・キリストはわたしたちの平和です、とパウロはこの手紙を読む人々に訴えるんです。
いつの時代のどこに生まれ育った誰であろうと、私たち人間はみんなどうしようもなく罪を握りしめて手放せないでいます。
創り主である神様を無視して、神様が愛しておられる世界のすべても、お互いも、自分自身さえも、自分勝手な欲求のままに傷つけてしまう罪。
自分の正しさでお互いの違いを裁いて、切り捨てて、時には誰かの尊厳や命までも奪ってしまう、そんな罪からどうしても自力で離れきれない私たちのために。神様ご自身でもある独り子のイエス様が、十字架の上で死なれました。
罪の結果が私たちの間にもたらす痛み、屈辱、悲しみ、孤独、何よりも神様との断絶を身代わりに味わって、イエス様は御自分の命で、私たちの罪の代償を支払ってくださったのです。
イエス様の十字架での死によって、ユダヤ人も異邦人も、いつどこで生まれ育った人であろうとみんな、罪を赦されて罪から解放されている。
そしてイエス様の復活によって、みんな同じ神様

の子どもとして生きるようにと招かれている。
聖書は私たちにそう告げ知らせています。
ありとあらゆる私たちの違いを、イエス様が乗り越えて神様の愛のもとに結び合わせてくださっている。だから「実にキリストはわたしたちの平和であります」とパウロは声高らかに宣言するんです。
ユダヤ人のパウロから見れば何もかもが違う人たち、でも同じイエス様を救い主と信じて従う人々に、パウロは心からこう呼びかけています。

「あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族です。」

神様の御子、イエス・キリストによって。
大事な独り子を差し出してくださったほどの、神様の愛によって。あらゆる違いの壁を取り壊されて、私たちは神様の家族だ！とパウロはエフェソの教会の人たちに、そしてこの手紙を読むすべての人たちに伝えているんです。

＜神の家族、神の家＞
それと同時に、私たちは神様が住まれるところ、神様の家だとパウロは今日の手紙の言葉で語っています。創り主である神様に感謝して、神様を礼拝する聖なる神殿。イエス・キリストを中心にして組み合わされ、成長し続ける建物。
聖霊の働きによって、神様が住まわれるところ。
それが私たち、教会という共同体です。
教会というのは、こうして建っているこの建物だけを指すんじゃありません。神様がここに呼び集めておられる一人一人、今日ここにおられるみなさんが教会を形作っている柱であり、床板であり、天井であり、窓であり、階段であり、ドアノブだと言っていいでしょう。
それぞれに神様が任せておられる役割があります。「私は何もできない」と自分では思っていたとしても、教会に必要でない人は誰もいません。
いろんな事情でたまにしか来られないという方も、今日たまたま、通りすがりに思いついて来たという方も、もちろん毎週ここに来ておられる方も。皆さんは、神様から「今、ここにいてほしい」と招かれて、その招きに応えてここに来られたお一人お一人です。
今日ここに来られなかった方のことも、神様は「ここにいてほしい」と招き続けておられます。
かつてイエス様は、ご自分について来ている弟子たちに手を差し伸べて言われました。

「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。」
（マタイ１２：４９-５０）

いろんな環境の、いろんな職業の、いろんな考え方や性格の人たちがイエス様の弟子として結び合わせられて、イエス様の兄弟、姉妹、お母さんと呼ばれたように。
あれこれある違いの壁を、イエス様の十字架で取り壊されて、一緒に生きるように結び合わされた

神様の家族として、私たちはここにいます。
また、イエス様は弟子たちにこうお教えになりました。

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」
（マタイ１８：２０）

イエス様の名によって、つまりイエス様の救いの力を信じて頼る、それ以外にはどんな条件もない二人、三人の集まりの中にイエス様が一緒にいてくださるんです。イエス様を救い主と信じる以外には、本当にあれこれ違うけど、そのあれこれの違いに応じて、神様からそれぞれ必要だと言われて、私たちはここにいます。
生きて働いて成長し続ける神様の家、教会として、私たちはここにいます。
イエス様と共にある平和を生きて、出会うすべての人にこの平和を伝えるためです。
ありとあらゆる私たちの違いを、イエス様が乗り越えて神様の愛のもとに結び合わせてくださっています。
ありとあらゆる違いの壁を取り払われて、イエス様に結び合わせられて、私たちはみんな神様の子ども、神の家族として一緒に生きられるんです。
この平和の福音を抱きかかえて、私たちは今日もこの場所からそれぞれの日常生活に送り出されていきます。
私たちが生きる日常は、まだまだ平和からは遠く見えるでしょう。
私たちが生きる現実は、違いの壁があちこちにそびえ立ってそこにヒビ一つ入れるのさえ難しく思えます。
ですが、私たちを神様から隔てる罪の壁は、もうイエス様が命がけで取り壊してくださいました。
だから今日も私たちは神の家族、神様の住まいとしてここに集まって、ここから出かけて行って、また帰ってきます。
この場所そのものではなかったとしても、「教会」という場所に帰ってくるように招かれています。
平和の福音はここから、イエス・キリストに結び合わせられている私たちの間からもう始まっているんです。
私たちを通して、聖霊によって、平和の主であるイエス様が今も働いておられます。
だから私たちの日常生活の一歩一歩、私たちの思いと言葉と行動の一つずつをイエス様に預けて、今日も送り出されていきましょう。
すべての人が神様の愛を受け入れて、神の家族、神様の家とされるその平和の日に期待しながら。
お祈りいたしましょう。